

〈特別企画〉沖繩返還50年を振り返る

今年5月15日、沖繩県の本土復帰から50周年を迎えた。1972(昭和47)年を境とする米軍統治時代と本土復帰後の体験談を、沖繩県鍼灸マッサージ師会元副会長で全盲の仲宗根義美さん(72)に語ってもらった。

不十分な学習環境

沖繩県立沖繩盲学校は1945(昭和20)年4

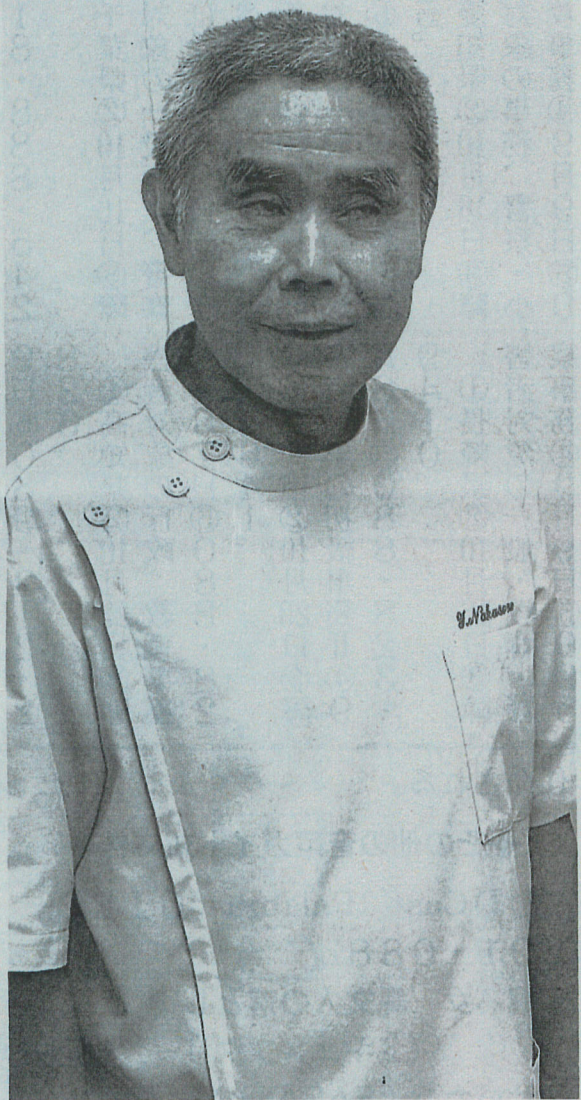
月以降、戦火に遭い、焼失してしまいました。戦後は復興が優先され、障害者福祉は後回しでした。戦前の卒業生らが中心となり、6年後の51(同26)年、学校が再開されました。戦争で親を亡くした、不発弾の爆発で視覚と手足を欠損した児童も多く、福祉行政の管轄での再開です。54(同29)年、福祉と教育に分離し、琉球政府立沖繩盲聾学校となりました。

本土と違いに苦勞

私は57(同32)年、7歳で入学しました。当時は点字教科書も全員に行き渡るほどなく、先輩が書き写した物を譲り受けて使っていました。本土では、54年に経済的に困窮している保護者を援助す

る「就学奨励制度」が始まるも、沖繩は除外されていたことも不足の理由の一つです。55(同30)年、点字図書製作と貸し出しが厚生省の委託事業となり、全国の図書館に点字本が増えました。沖繩は海外のため対象外でしたが、復帰と同時に復帰と同時に対象に含まれるまで事業の中心的役割を担っていた日本点字図書館が厚意で寄贈してくれたので本は少しずつ増えていきました。私は病院で40年間、マッサージ師として働きま

県鍼灸マッサージ師会元副会長 仲宗根 義美さん



したが、米軍統治時代、沖繩ではあきの免許を取っても本土では使えませんでした。沖繩は戦前のあはき法が適用された試

んは沖繩盲が焼失する少し前、疎開先確保のため、地元・宮崎県に帰郷しました。そのまま終戦を迎え、沖繩に帰れたのは53(同28)年でした。戻られた後は福祉活動の基盤作りにもまい進。57年、沖繩盲人福祉会の設立に関

本土で得た宝物

復帰前、大阪医科大学の資金で目の手術を受けられることになり、大阪を訪れたこともあります。沖繩は発展途上国に近

大変でした。手術後、視力が0・06に回復したこともあり、沖繩盲の小中学部にできた弱視学級に編入することにしました。墨字が勉強できてうれしかったです。73(同48)年、23歳で卒業し、東京教育大付属盲学校に入学しました。差別を心配しましたが、全国から生徒が集まる学校だから特に何もなかったです。同級生に、「一校のゆめ財団」の藤井亮輔さんがいます。彼は沖繩に関心があり、沖繩の情報を教えると喜ばれました。76(同51)年、沖繩に帰ってきましたが、その年の暮れ、藤井さんが私を訪ねてこられました。その縁もあってか、藤井さんの盲学校教員最初の赴任地は沖繩なんです。今でも手紙などで付き合いです。

本土で得た宝物

付属盲の副担任は塩谷治さんで、ある日、塩谷さんから「真喜屋実蔵さんを知っているか？」と聞かれました。真喜屋さんは特別にお世話になった沖繩盲の先輩です。塩谷さんと真喜屋さんは早稲田大の同級生で、塩谷さんは「彼がいなかったら点字を学ぶ、視覚障害者を知る、盲教育で働くこともなかったら」と教えてくれました。本土復帰から3年ほどは、沖繩は生活状況が激変したと聞いています。東京進学と時期がかぶるため詳しいことは知りませんが、物価が上がって大変だったらしいです。お金もドルから円に変わり、「10円はいくらなんだ」と計算がややこしくなりました。復帰前は固定相場制で1ドル360円でしたが、変動相場制に変わったことで円高になりバスの料金も2〜3倍になって困りました。ただ、高度経済成長に入り、賃金や給料も上がって私が沖繩に帰ってきた時には皆、新しい生活に慣れていました。【澤田健】

験だったからです。障害年金も医療保険もない困窮した生活だったため、盲学校を卒業後、本土で学び直す人も多かったです。

高橋元校長に感謝

初代校長、高橋福治さん

わり、60(同35)年、戦前の盲学校があった私有地を協会に寄付し、宮崎に帰られました。71(同46)年、戦前から数えての盲学校50周年の時、沖繩に招かれた高橋さんと握手したときのぬくもりや柔らか

荷物検査なども徹底され

藤井亮輔さん、塩谷治さん、真喜屋実蔵さん…縁に恵まれ

(なかそね・よしみ)病院を定年退職後は、那覇市の鍼灸接骨院で週3日のアルバイトに励む。妻、息子(長男)夫婦の2世帯住宅で4人暮らし